



島地勝彦のスペシャル人生相談

週刊プレイボーイを100万部売り上げた伝説的な編集長で、現在はエッセイスト&バーマンの島地勝彦氏が本音で語る『スペシャル人生相談』。豊富な人生経験と独自の人生哲学であなたのお悩みに回答する――。

最近の読書で巡り合った

傑作の一冊を教えましょうか

本のソムリエを自認される島地先生は今年の長い9日間の年末年始の休暇中、どんな本を読まれましたか。大変興味があります。教えてください。(60歳、男性、会社役員)

――シマジさんに打ってつけの相談ですね。この年末年始はどう過ごされたのですか

シマジ 12月31日は例年のごとく、作曲家の三枝成彰さんが主催するベートーヴェンの全交響曲を第1番から第9番まで1日で連続演奏する「ベートーヴェンマラソン」を聴きに東京文化会館に行きました。1月4日には同じ東京文化会館でウクライナ国立歌劇場オペラが演じる『アイダ』を観劇しました。どちらも感動的でした。

そのほかの休日は寝正月で読書三昧でした。

――何冊読まれたのですか

シマジ いま放送中のNHKの朝ドラ「ばけ

け」に触発されて、モデルであるラフカディオ・ハーンの『怪談・骨董』（河出文庫）を読みました。原作も傑作でしたが、翻訳者の平川祐弘の古典の教養には感動しました。『たいした問題じゃないが』（岩波文庫）は、行方昭夫の名訳で往時の英国のコラムニストの傑作選でした。なかでもエドワード・ルーカス作の小品『ロンドン名物』が出色だった。動物園で人気者のメスの象の告白である。「1876年にはあのチャーチルがたった二歳だったって、知ってます？ 考えてもご覧なさい。彼が小さな頭のよちよち歩きの坊やだったとき、あたしを見るためによく来ていたものです。何度も背中に乗せて上げましたよ。あたしの牙にパンを載せたり、あたしの背中に乗ったりした子供たちの将来がどうなったか、よく思うのだけど、覚えているのは、若くして高い位についたチャーチル坊やだけです」

――そろそろ白眉の一冊を教えてください

シマジ それは昨年12月1日に講談社から発売された『ジョン・レノン 運命をたどる ヒーローはなぜ撃たれたのか』（青木富貴子著）が衝撃の一冊でした。20世紀最大のロックスター、ジョン・レノンと後の妻になる日本人ヨーコ・オノ、そして狙撃者マーク・チャップマンの人生の軌跡を何十年もかけて取材したノンフィクションの傑作です。この3人の人生を克明に活写していく。「1940年10月9日、ジョン・ウィンストン・レノンがリヴァプールオックスストリート産科医院で生まれた日はひどい爆撃の最中だった、と多くの本に書かれている。しかし、これは数あるビートルズ神

話の一つに過ぎない。当時、リヴァプールを襲った爆撃は9月21日～22日、その後は10月16日だった。10月9日には爆撃がなかったことは明らかになっている」と青木富貴子は多くの資料を読み込んで断言する。ジョン・レノンがなぜ天才的な歌手になれたのかという謎は、「祖父レノンは1880年代にダブリンからニューヨークへ渡ると『アンドリュー・ロバートソンズ・カラード・オペラティック・ケンタッキー・ミンストレルズ』のメンバーになった。当時のミンストレルズは顔を黒く塗った白人が派手なパフォーマンスを繰り広げて人気を呼んでいた」。

そのメンバーの一員として、人気を博した祖父の遺伝子が、隔世遺伝で孫のジョン・レノンに継がれたのであろう。孤児院の近くで育ったジョン・レノンがビートルズを結成して超ビリオネアになっていく軌跡を丁寧に活写している。一方、1933年2月18日生まれのヨーコ・オノは「母方の安田家は、母磯子の祖父、安田善次郎が一代で築いた財閥だった。＜中略＞東京大学の安田講堂、日比谷公会堂、早稲田大学への寄付など、それも匿名で行った篤志家だった。＜中略＞父方の血統も際だっていた。祖父小野英二郎は日本人をして初めてアメリカの大学で博士号を取った秀才だった。日本銀行総裁から熱心に入行を勧められると学問の道をあきらめ、日本銀行ニューヨーク支店勤務、日本興業銀行の副総裁に迎えられ、のちの総裁になっている」。令嬢としてのヨーコ・オノはいわゆる上流階級の日本語を話していたという。

運命的なジョン・レノンとヨーコ・オノの出会の面白さは本書に譲るとして、わたしがいちばん感動したのは、夏の軽井沢でジョン・レノンとヨーコ・オノ、一人息子のショーンが自転車に乗って3人で過ごしたシーンである。

最後に狙撃犯マーク・チャップマンに言及したい。ジョン・レノンが暗殺されたニューヨーク州では死刑制度が廃止され、終身刑しかない。故にチャップマンは当時最高度警備体制のアッティカ刑務所に収監されていた。ジョン・レノンが暗殺された1980年12月8日から3年10カ月後、青木富

喜子はマーク・チャップマンに手紙を出している。返事は来たが長続きせず、音信はぴたりと途絶えた。長い空白期間の後、刑務所内でチャップマンに会ったのは34年4カ月後のことだった。

「向こうの端の扉が開き、えんじ色の上着とジーンズをはいた中年の白人男が近づいてきた。チャップマンだった。ブルーの瞳でわたしを正視する。一瞬、わたしも彼の目をのぞき込む。次の瞬間、彼は笑みを浮かべ、握手を求めてきた。差し出された手は氷のように冷たいのには驚いた。『君は誰よりも粘り強いリポーターだよ』開口一番こう言った」

犯人のチャップマンは異常者であるが、彼はハワイで妻のグローリアと結婚していた。グローリアは事件後も離婚をせず、刑務所のチャップマンを慰問している。チャップマンは、ジョンが平和のためのベッドインは本質的には上っ面の悪ふざけだったなどとインタビューで答えていることを知り、レノンがインチキ野郎であることは何の偽りもない事実だと確信した。とはいえ、いくらジョン・レノンに失望させられたとして、なぜ彼を殺そうとまで考えるようになったのか。「マークは自分が何の価値も無い人間だと思ったのです。彼はひとかどの人物になりたかった。そのために、名のある人物を殺す。そう考えたと言っています。」これこそ正鵠を得た感想ではないだろうか。

――すぐ本屋に行って読みたくなりました

シマジ 実は青木富喜子さんとは若いとき数年週刊プレイボーイの釜の飯を喰った仲なのです。わたしならこの書の献辞は「我が夫ピート・ハミルに捧ぐ」としましたね。

――もしかしてあの映画『幸福の黄色いハンカチ』の原作者のピート・ハミルさんですか

シマジ そうです。